

眉かくしの靈

泉鏡花作

第一章

木曾街道、奈良井の驛は、中央線起點飯田橋より一五八哩マイル海抜三二〇〇尺、と言出すより、膝栗毛を思ふ方が手取早く行旅の情を催させる。

こゝは彌次郎兵衛、喜多八が、とぼ／＼と鳥居峠を越すと、日も西の山の端に傾きければ、兩側の旅籠屋より、女ども立出で、もし／＼お泊りぢやござんしないか、お風呂も湧いて居づにお泊りな／＼

――喜多八が、まだ少し早いけれど――彌次郎、もう泊つてもよからう、なう姐さん――女、お泊りなさんし、お夜食はお飯でも、蕎麥でも、お蕎麥でよかあ、おはたご安くして上げませづ。彌次郎、いかさま、安い方がいゝ、蕎麥でいくらだ。

女、はい、お蕎麥なら百十六錢でござんさあ。二人は旅銀の乏しさに、そんなら然うと極めて泊つて、湯から上ると、その約束の蕎麥が出る。早速にくひ

かゝつて、喜多八、こつちの方では蕎麥はいゝが、
したぢが悪いにはあやまる。彌次郎、そのかはりに
お給仕がうつくしいからいゝ、なう姐さん、と洒落
かゝつて、もう一杯くんねえ。女、もうお蕎麥はそ
れ切りでござんさあ。彌次郎、なに、もうねえのか、
たつた二ぜんづゝ食つたものを、つまらねえ、これ
ぢやあ食ひたりねえ。喜多八、はたごが安いも凄じ
い。二はいばかり食つて居られるものか。彌次
郎。馬鹿なつらな、錢は出すから飯をくん
ねえ。無慙や、なけなしの懐中を、けつ
く蕎麥だけ餘計につかはされて悄氣返る。その夜、
故郷の江戸お箆笥町引出し横町、取手屋の鑢兵衛と
て、工面のいゝ馴染に逢つて、ふもとの山寺に詣で、
鹿の鳴聲を聞いた處

．．．．．と思ふと、ふと此處で泊りたく成つた。
停車場を、もう汽車が出ようとする間際だつたと言
ふのである。此の、筆者の友、境贊吉は、實は篤
かづら木曾の棧橋、寐覺の床などを見物のつもりで、
上松までの切符を持つて居た。霜月の半であつた。
「．．．．．然も、その（蕎麥二膳）には不

思議な縁がありましたよ……」
と、境が話した――

昨夜は松本で一泊した。御存じの通り、此の線の
汽車は鹽尻から分岐點で、東京から上松へ行くもの
が、松本で泊つたのは妙である。尤も、松本へ用が
あつて立寄つたのだと言へば、それまでゞ雑と濟む
が、それだと、しめくゝりが緩んで些と辻褃が合は
ない。何も穿鑿をするのではないけれど、實は日數
の少いの、汽車の遊びを貪つた旅行で、行途は上
野から高崎、妙義山を見つゝ、横川、熊の平、淺間
を眺め、輕井澤、追分をすぎ、篠の井線に乘替へて、
姨捨田毎を窓から覗いて、泊りは其處で松本が豫定
であつた。その松本には「いゝ娘の居る旅館があ
ります。懇意ですから御紹介をしませう」と、名の
きこえた寶家が添手紙をしてくれた。……よ
せばいゝのに、昨夜その旅館につくと、成程、帳場
には其らしい束髪そくはつの女をんなが一人見えたが、座敷へ案内
したのは無論女中むろんぢよちゆうで。……さてその紹介状を
渡したけれども、娘むすめなんぞ寄つても着かない、
……ばかりでない。此の霜夜しもよに、出がらの生温なまぬるい

澁茶一杯汲んだきりで、お夜食ともお飯とも言出さぬ。座敷は立派で卓は紫檀だ。火鉢は大い。が火の氣はぼつちり。で、灰の白いのにもかみついて、何しろ暖いものでお銚子をと云ふと、板前で火を引いてしまひました、何にも出来ませんと、女中の素氣なさ。寒さは寒し、成程、火を引いたやうな、家中寂寞とはして居たが、まだ十一時前である。酒だけなりと、頼むと、お生憎。酒はないのか、ござりません。ー ぢや、麥酒でも。それもお氣の毒様だと言ふ。姐さん、。境は少々居直つて、何處か近所から取寄せて貰へまいか。へいもう遅うござりますで、飲食店は寢ましたでな。飲食店だと言やあがる。はてな、停車場から、震へながら俾で来る途中、つい此の近まはりに、冷い音して、川が流れて、橋がかゝつて、兩側に遊廓らしい家が並んで、茶めしの赤い行燈もふはりと目の前にちらつくのにー あゝ、恚うと知つたら輕井澤で買った二合鑊を、次郎どの、狗ではないが、皆なめてしまふのではなかつたものを。大歎息とともに空腹をぐうと鳴らして可哀な聲で、姐さん、然うすると、酒もなし、麥酒もなし、肴もなし。・

お飯は。いえさ、今晚の旅籠の飯は。へい、それが間に合ひませんで……。火を引いたあとなもんでなあー何の怨か知らないが、恚う成ると冷遇を通越して奇怪である。なまじ紹介状があるだけに、喧嘩面で、宿を替へるとも言はれない。前世の業と斷念めて、せめて近所で、蕎麥か餛飩の御都合は成るまいか、と恐る／＼申出ると、餛飩なら聞いて見ませう。あゝ、それを二ぜん頼みます。女中は遁腰のもつたて尻で、敷居へ半分だけ突込んで居た膝を、ぬいと引つこ抜いて不精に出て行く。

待つ事少時して、盆で突出した奴を見ると、井が唯た一つ。腹の空いた悲しさに、姐さん二ぜんと頼んだのだが。と詰るやうに言ふと、へい、二ぜん分、装込んでございますで。いや、相わかりました。何うぞお構ひなく、お引取を、と言ふまでもなし……。ついと尻を見せて、すた／＼と廊下を行くのを、繼兒のやうな目つきで見ながら、抱込むばかりに蓋を取ると、成程、二ぜんもり込みだけに汁がぼつちり、餛飩は白く乾いて居た。

此の旅館が、秋葉山三尺坊が、飯綱權現へ、客を
たちものにした處へ打撞つたのであらう、泣くより
笑だ。

その・・・・餛飩二ぜんの昨夜を、むかし彌次
郎、喜多八が、夕旅籠の蕎麥二ぜんに思ひ較べた。
聊か仰山だが、不思議の縁と言ふのは此で　　―
急に奈良井へ泊つて見たく成つたのである。

日あしも木曾の山の端に傾いた。宿には一時雨颯
とかゝつた。

雨ぐらゐの用意はして居る。驛前の俵は便らない
で、洋傘で寂しく凌いで、鴨居の暗い檐づたひに、
石ごろ路を辿りながら、度胸は据ゑたぞ。―　持
つて来い、蕎麥二膳、で、昨夜の餛飩は暗討だ、
―　今宵の蕎麥は望む處だ。―　旅のあはれ
を味はうと、硝子張の旅館一二軒を、故と避けて、
軒に山駕籠と干菜を釣し、土間の竈で、割木の火を
焚く、佗しさうな旅籠屋を烏のやうに覗込み、黒き
外套で、御免と、入ると、頬冠をした親父が其の竈

の下を焚いて居る。框がだゞ廣く、爐が大きく、煤けた天井に八間行燈の掛つたのは、山駕籠と對の註文通り。階子下の暗い帳場に、坊主頭の番頭は面白い。

「入らつぜえ。」

蕎麥二膳、蕎麥二膳と、境が覺悟の目の前へ、身輕にひよいと出て、慇懃に會釋をされたのは、焼麩だと思ふ（しつぽく）の加料が蒲鉾だつたやうな氣がした。

「お客様だよー 鶴の三番。」

女中も、服装は木綿だが、前垂がけの薩張した、年紀の少い色白なのが、窓、欄干を覗く、松の中を、攀上るやうに三階へ案内した。ー 十疊數。・・・柱も天井も丈夫造りで、床の間の詠にも聊かの厭味がない、玄關つきとは似もつかない、しつかりした屋臺である。

敷蒲團の綿も暖かに、熊の皮の見事なのが敷いてあるは。はゝあ、膝栗毛時代に、峠路で賣つて居た、

猿の腹ごもり、大蛇の肝、獸の皮ふのは此れだ、と滑稽た殿様に成つて件の熊の皮に着座に及ぶと、すぐに臺十能へ火を入れて女中さんが上つて来て、惜氣もなく銅の大火鉢へ打まけたが、又夥多しい。青い火さきが、堅炭を搦んで、眞赤に■つて、窓に沁入る山嵐は颯と冴える。三階に此の火の勢は、大地震のあとでは、些と申すのも憚りあるばかりである。

湯にも入つた。

さて膳だが、――蝶脚の上を見ると、蕎麥扱にしたは氣恥かしい。わらさの照焼はとにかくとして、ふつと煙の立つ厚焼の玉子に、椀が眞自な半ペんの葛かけ。皿についたのは、此のあたりで佳品と聞く、鶉を、何と、頭を猪口に、股をふつくり、胸を開いて、五羽、殆ど丸焼にして芳しくつけてあつた。

「難有い、……實に難有い。」

境は、其の女中に馴れない手つきの、其も嬉し
い……酌をして貰ひながら、熊に乗つて、仙

人の御馳走に成るやうに、慇懃に禮を言つた。

「これは大した御馳走ですな。……實に難
有い……全く禮を言ひたいなあ。」

心底の事である。はぐらかすとは様子にも見えな

いから、若い女中もかけ引なしに、

「旦那さん、お氣に入りました嬉しうございます

わ。さあ、もうお一つ。」

「頂戴しよう。尚ほ重ねて頂戴しよう。——時

に姐さん、此の上のお願いだがね、……何う

だらう、此の鶉を別に貰つて、此處へ鍋に掛けて、

煮ながら食べると言ふわけには行くまいか。鶉はま

だいくらもあるかい。」

「え、策に三杯もございます。まだ臺所の柱に

も束にしてかゝつて居ります。」

「そいつは豪氣だ。——少し餘分に貰ひたい、

此處で煮るやうに……可いかい。」

「はい、然う申します。」

「次手にお銚子を。火がいゝから傍へ置くだけで

も冷めはしない。……通ひが遠くつて氣の毒

だ。三本ばかり一時に持つておいで。……何

うだい。岩見重太郎が註文をするやうだらう。」

「おほゝ。」

今朝、松本で、顔を洗つた水瓶の水とゝもに、胸が氷に鎖されたから、何の考へもつかなかつた。こゝで暖かに心が解けると、・・・分つた、餛飩で虐待した理由と言ふのが――紹介状をつけた晝伯は、近頃でこそ一家をなしたが、若くて放浪した時代に信州路を経歴つて、その旅館には五月あまりも閉籠つた。滞る旅籠代の催促もせず、歸途には草鞋錢まで心着けた深切な家だと言つた。が、あゝ、其だ。・・・おなじ人の紹介だから旅籠代を滞らして、草鞋錢を貰ふのだと思つたに違ひない。・・・

「えゝ、此は、お客様、お粗末な事でした。」
と紺の鯉口に、おなじ幅廣の前掛した、瘦せた、色のやゝ青黒い、陰氣だが律儀らしい、まだ三十六七ぐらゐな、五分刈の男が丁寧に襖際に畏まつた。

「何ういたして、・・・實に御馳走様。・・・」

・・・番頭さんですか。」

「いえ、當家の料理人にございますが、至つて不束でございまして。・・・それに、斯やうな山家邊鄙で、一向お口に合ひますものもございませんで。」

「飛んでもないこと。」

「つきまして、・・・唯今、女どもまでおつしやりつけでございましたが、鶉を、貴方様、何か鍋でめしあがりたいといふお言で、如何やうにいたして差上げませうやら、右、女どもも矢張り田舎ものゝ事でございますで、よくお言がのみ込めかねます。ゆゑに失禮ではございますが、一寸お伺ひに出ましてございますが。」

境は少なからず面くらつた。

「そいつは何うも恐縮です。――遠方の處を。」
と浮り言つた。・・・

「串戯のやうですが、全く三階まで。」
「何う仕りました。」

「まあ、此方へ――お忙しいんですか。」
「いえ、お膳は、最う差上げました。それが、お

お客様も、貴方様のほか、お二組ぐらゐよりございません。」

「では、まあ此方へ。―― さあ、ずっと。」

「はッ、何うも。」

「失禮をするかも知れないが、まあ、一杯。あゝ、

―― 丁度お銚子が来た。女中さん、お酌をして

あげて下さい。」

「は、いえ、手前不調法で。」

「まあ、一杯。―― 弱つたな、何うも、鶉を

鍋でと言つて、……其の何ですよ。」

「旦那様、帳場でも、あの、然う申して居ります

の。鶉は焼いてめしあがるのが一番おいしいんでご

ざいますつて。」

「お膳にもつけて差上げましたが、此を頭から、

その脳味噌をするりとな、ひと嚙りにめしあがりま

すのが、おいしいんでございまして、えゝ飛んだ田

舎流儀ではございますがな。」

「お料理番さん……私は決して、料理をと

やかう言つたのではないのですよ。……弱つ

たな、何うも。實はね、ある其の宴會の席で、其の

席に居た藝妓が、木曾の鶯の話をしたんです。――大分酒が亂れて来て、何とか節と言ふのが、あつち此方ではじまると、木曾節と言ふのがこの時顯れて、――きいても可懐い土地だから、うる覺えに覺えて居るが、（木曾へ木曾へと積出す米は）何とかつて言ふのでね……

「然やうで。」と眞四角に猪口をおくと、二つ提の煙草入から、吸ひかけた煙管を、金の火鉢だ、遠慮なくコツンと敲いて、

「……（伊那や高遠の餘り米）……と言ふでございます、米、此の女中の名でございませ、お米。」

「あら、何だよ、伊作さん。」

と女中が横ならみに笑つて睨んで、

「旦那さん、――此の人は、家が伊那だもんでございますから。」

「はあ、勝頼様と同國ですな。」

「まあ、勝頼様は、こんな男振ぢやありません

が。

「當前よ。」

とむツつりした料理番は、苦笑もせず、又コツ、
ンと煙管を拂く。

「それだもんですから、伊那の鬮肩をしますの

ー 木曾で唄ふのは違ひますが。ー (伊那

や高遠へ積出す米は、みんな木曾路の餘り米) ー

と言ひますの。」

「さあ．．．それは孰ちにしろ．．．その
の木曾へ、木曾への機掛に出た話なんですから、私
たちも酔つては居るし、それがあとの贅川だか、峠
を越した先の藪原、福島、上松のあたりだか、よく
は訊かなかつたけれども、其の藝妓が、客と一所に、
鶯あみを掛けに木曾へ行つたと言ふ話をしたんで
す．．．．まだ夜の暗いうちに山道をづん／＼
上つて、案内者の指揮の場所で、かすみを張つて罫
を揚げると、夜明け前、霧のしら／＼に、向うの尾上
を、ばつと此方の山の端へ渡る鶯の群が、むら／＼
と来て、羽ばたきをして、かすみに掛る。じわ／＼
ととつて占めて、すぐに焚火で附焼にして、膏の熱
い處を、ちゆツと吸つて食べるんだが、そのおいし
い事、．．．．と言つて、話をしてね．．．．」

「はあ、まつたくで。」

「……ぶる／＼寒いから、煮爛で、一杯の
みながら、息もつかずに、幾口か鶉を噛つて、あゝ、
おいしいと一息して、焚火に獅噛みついたのが、す
つと立つと、案内についた土地の獵師が二人、きや
ツと言つた。―その何なんですよ、藝妓の口が
血だらけに成つて居たんだとさ。生々とした半熟の
小鳥の血です。……と此の話をしながら、う
っかりしたやうに其の藝妓は手巾で口を壓へたんで
すがね……。たら／＼と赤いやつが沁みさうで、
私は顔を見ましたよ。觸ると撓ひさうな瘦せぎすな、
すらりとした、若い女で……。聞いてもうま
さうだが、これは凄かつたらう、その時、東京で想
像しても、嶮いとも、高いとも、深いとも、峰谷の
重り合つた木曾山中のしら／＼あけです……。・
暗い裾に焚火を搦めて、すつくりと立上つたと言ふ、
自然、目の下の峰よりも高い處で、霧の中から綺麗
な首が。」

「可厭、旦那さん。」

「話は拙くつても、何となく不気味だね。其の口が血だらけなんだ。」

「いや、如何にも。」

「あゝ、よく無事だったな、と私が言ふと、何うして？と訊くから、然う云ふのが、慌てる銃獵家だの、魔のさした獵師に、峰越の笹原から狙撃に二つ弾丸を食ふんです。．．．場所と言ひ．．．時刻と言ひ．．．昔から、夜待、あけ方の鳥あみには、魔がさして、怪しい事があると云ふが、まったく其は魔がさしたんだ。だつて、靦面に綺麗な鬼に成つたぢやあないか。．．．何うせ然うよ、．．．私は鬼よ。．．．でも人に食はれる方の．．．なぞと言ひながら、でも可憐いわね、ぞつとすると、又口を手巾で壓へて居たのさ。」

「ふーん。」

と料理番は、我を忘れて沈んだ聲して、

「えゝ、旦那。へい、何うも、いや、全く。．．．

實際、危うございますな。．．．然う言ふ場合に、屹と怪我があるんでして．．．よく、その

姐ねえさんは御ご無ぶ事じでした。此この贄にへ川がはの川か上かみ、御おん嶽たけ口ぐち。

美み濃のよりの峽かひは、よけいに取とれますが、その方かたの場ばし所よは何ど處こでございませるか存ぞんじませぬ。――藝げい妓しや衆しうは東京とうきやうのどちどちらの方かたで。」

「何なに、下した町まちの方ほうですがね。」

「柳やなぎ橋はし……」と言いつて、覗のぞくやうに、熟じう

と見みた。

「……或あるはその新しん橋はしとか申まをします……

「いや、その眞ま中なかほどです……日本にほん橋はしの方ほう

だけれど、宴えん會くわいの席せきばかりでの話はなしですよ。」

「お處ところが分わかつて差さ支しへがございませぬければ、參さん考かうのために、其その場ばし所よを伺つかつて置おきたいくらゐでござ

いますして……此この、深しん山さん幽いう谷こくの事ことは、人にん

間けんの智ち慧えには及およびませぬ。――」

女ぢよ中ちゆうも俯うつ向むいて暗くらい顔かほした。

境さかひは、此この場ば合あひ誰だれもしよう、乗のり出だしながら、

「何か、此この邊へんに變かはつた事ことでも。」

「……別にその、と云いつてございませぬ。

しかし、流ながれに瀬せがございませうに、山やまにも淵ふちがご

ざいますで、氣をつけなければ成りません。——
唯今さしあげました鶉は、これは、つい一兩日續き
まして、珍しく上の峠口で獵があつたのでございま
す。」

「さあ、それなんですよ。」

境は更めて猪口をうけつつ、

「料理番さん。きみのお手際で膳につけておくん
なすつたのが、見てもうまさうに、香しく、脂の垂
れさうなので、ふと思出したのは、今の藝妓の口が
血の一件でね。しかし私は坊さんでも、精進でも、
何でもありません。望んでも結構なだけけれど、見
給へ。——窓の外は雨と、もみぢで、霧が山を織
つて居る。峰の中には、雪を頂いて、雲を貫いて聳
えたのが見えるんです。——どんな拍子かで、ひ
よいと立ちでもした時口が血に成つて首が上へ出る
と……野郎で此の面だから、その藝妓のやう
な、凄く美しく、山の神の化身のやうには見えまい
がね。落残つた柿だと思つて、窓の外から烏が突か
ないとも限らない、……ふと變な氣がしたも
のだから。」

「お米さん　ー　電燈が何故か、遅いでないか。」

料理番が沈んだ聲で言った。

井川の瀬が響く。時雨は晴れつゝ、木曾の山々に暮が迫つた、奈良

第二章

「何だい、何うしたんです。」

「あゝ、旦那。」

と暗夜の庭の雪の中で。

「鷺が来て、魚を狙ふんでございます。」

「すぐ窓の外、間近だが、池の水を渡るやうな料理番——その伊作の聲がする。」

「人間が落ちたか、獺でも駈廻るのかと思つた、

えらい音で驚いたよ。」

此は、その翌目の晩、おなじ旅店の、下座敷での事であつた。

境は奈良井宿に逗留した。こゝに積つた雪が、朝から降出したゝめではない。別に此のあたりを見物するためでもなかつた。……昨夜は、あれから——鶉を鍋でと誂へたのは、しやも、かしはをするやうに、膳のわきで火鉢へ掛けて煮るだけの事、と言つたのを、料理番が心得て、そのぶつ切を、皿に山もり。目筈に一杯、葱のざく／＼を添へて、

醬油も砂糖も、むきだしに擔ぎあげた。お米が烈々と炭を継ぐ。

越の方だが、境の故郷みまはりでは、季節に成ると、此の鶉を珍重すること一通りでない。料理屋が鶉御料理、じぶ御このみなど言ふ立看板を軒に掲げる。鶉うどん、鶉蕎麥と蕎麥屋までが貼紙を張る。たゞし安くない。何の椀、どの鉢に使つても、御羹、おん小蓋の見識で。ぼつちり三嚮、五嚮よりは附けないのに、葱と一所に打覆けて、鍋からもちこぼれるやうな湯氣を、天井へ立てたは嬉しい。

剩へ熱爛で、熊の皮に胡坐で居た。
藝妓の化ものが、山賊にかはつたのである。

寝る時には、厚衾に、此の熊の皮が上へ被つて、袖を包み、蔽ひ、裙を包んだのも面白い。あくる日、雪に成らうとてか、夜嵐の、じんと身に浸むのも、木曾川の瀬の凄いのもの、数ともせず、酒の血と、獸の皮とで、ほか／＼して三階にぐつすり寐込んだ。

次第であるから、朝は朝飯から、ふつ／＼と吹いて啜るやうな豆腐の汁も氣に入つた。

一昨日の旅館の朝は何うだらう。．．．溝の上澄のやうな冷い汁に、御羹ほどに蜷が泳いで、生煮の臭さと言つたらなかつた。

山も、空も氷を透す如く澄切つて、松の葉、枯木の閃くばかり、晃々と陽がさしつゝ、それで、ちら／＼と白いものが飛んで、奥山に、熊が人立して、針を噴くやうな雪であつた。

朝飯が済んで少時すると、境はしく／＼と腹が疼み出した。――しばらくして、二三次はゞかりへ通つた。

あの、餛飩の祟りである。鵜を過食したゝめでは斷じてない。二ぜん分を籠にした生がへりのうどん粉の中毒らない法はない。腹を壓へて、餛飩を思ふと、思ふ下からチク／＼と筋が動いて痛み出す。――尤も、戸外は日當りに針が飛んで居ようが、少々腹が痛まうが、我慢して、汽車に乗れないと言ふ容

體ではなかつたので。．．．唯、も知らない。
此の宿の居心のいゝのにつけて、何處かへのつらあ
てにと、逗留する氣に成つたのである。

處で座敷だが、その二度めだつたか、廁の
かへりに、我が座敷へ入らうとして、三階の欄干か
ら、ふと二階を覗くと、階子段の下に、開けた障子
に、箒とはたきを立掛けた、中の小座敷に炬燵があ
つて、床の間が見通される。．．．床に行李と
二つばかり重ねた、あせた萌葱の風呂敷づゝみの、
眞田紐で中結へをしたのがあつて、旅商人と見える
中年の男が、づつぶり床を背負つて當つて居ると、
むかひあひ向合に、一人の、中年増の女中が一寸浮腰で、膝を
ついて、手さきだけ炬燵に入れて、少し仰向くやう
にして、旅商人と話をして居る。

なつかしい浮世の状を、山の崖から掘出して、旅
宿に嵌めたやうに見えた。

座敷は熊の皮である。境は、ふと奥山へ棄てられ
たやうに、里心が着いた。

一昨日松本で城を見て、天守に上つて、其の五つ
め朝霜の高層に立つて、悚然としたやうな、雲に連
る、山々の犇と再び窓に来て、身に迫るのを覺えも
した。バスケットに、等閑に絡めたまゝの、城あと
の崩れ堀の苔むす石垣を這つて枯残つた小さな蔦の
紅の、鶉の血のしたゝる如きのを見るにつけて
も。……急に寂しい。「お米さん、下階に座
敷はあるまいか。――炬燵に入つてぐつすりと
寐たいんだ。」

二階の部屋々は、時ならず商人衆の出入りがあ
るからと、望む處の下座敷、おも屋から、土間を長々
と板を渡つて離座敷のやうな十疊へ導かれたのであ
つた。

肱掛窓の外が、すぐ庭で、池がある。

白雪の飛ぶ中に、緋鯉の背、眞鯉の鱗の紫は美し
い、梅も松もあしらつたが、大方は檜榎の大木であ
る。木の樹の二抱ばかりなのさへすつくくと立つ。が、
いづれも葉を振つて、素裸の山神の如き装だつたこ

とは言ふまでもない。

午後三時頃であつたらう。枝に梢に、雪の咲くのを、炬燵で斜違ひに、くの字に成つて――いい夫婦だとお目に掛きたい。

肱掛窓を覗くと、池の向うの椿の下に料理番が立つて、つくねんと腕組して、熟と水を瞻るのが見えた。例の紺の筒袖に、尻からすぼんと巻いた前垂で、雪の凌ぎに鳥打帽を被つたのは、苟くも料理番が水中の鯉を覗くとは見えない。大な鵜が沼の鱒を狙つて居る形である。山も峰も、雲深く其の空を取圍む。

境は山間の旅情を解した。「料理番さん、晩の御馳走に、其の鯉を切るのかね。」
「へへ。」と薄暗い顔を上げてニヤリと笑ひながら、鳥打帽を取つてお時儀をして、また被り直すと、其のまゝこそ／＼と樹を潜つて廂に隠れる。

帳場は遠し、あとは雪がやゝ繁く成つた。

同時に、さら／＼さら／＼と水の音が響いて聞える。「――又誰か洗面所の口金を開放したな。」
此がまた二度めで。・・・今朝三階の座敷を、此處へ取替へない前に、些と遠いが、手水を取るのに清潔だからと女中が案内をするから、此の離座敷に近い洗面所に来ると、三ヶ所、水道口があるのに其のどれを捻つても水が出ない。然ほどの寒さとは思へないが凍てたのかと思つて、飴のやうに高く手を鳴して女中に言ふと、「あれ、汲込みます。」
と駈出して行くと、やがて、スツと水が出た。「――座敷を取替へたあとで、はゞかりに行くと、外に手水鉢がないから、洗面所の一つを捻つたが、その時はほんのたら／＼と滴つて、辛うじて用が足りた。

しばらくすると、頻りに洗面所の方で水音がする。炬燵から潜出て、土間へ下りて橋が／＼りからそこを覗くと、三ツの水道口、残らず三條の水が一齊にざつと灌いで、徒らに流れて居た。たしない水らしいのに、と一つ一つ、丁寧にしめて座敷へ戻つた。が、その時も料理番が池のへりの、同じ處につくねんとイんで居たのである。くどいやうだが、料理番の池

に立つたのは、此で二度めだ。．．．朝のは十時頃であつたらう。ト其の時料理番が引込むと、やがて洗面所の水が、再び高く響いた。

又しても三條の水道が、残らず開放しに流れて居る。おなじ事、たしない水である。あとで手を洗はうとする時は、屹と涸れるのだからと、又しても口金をしめて置いたが。

――

いま、午後の三時ごろ、此の時も、更に其の水の音が聞え出したのである。庭の外には小川も流れる。奈良井川の瀬も響く。木曾へ来て、水音を気にするの、船に乗つて波を見まいとするやうなものである。望みこそすれ、嫌ひも避けもしないのだけだ、不思議に洗面所の開放しばかり氣に成つた。

境は又廊下へ出た。果して、三三條とも揃つて――しよる／＼と流れて居る。「旦那さん、お風呂ですか。」手拭を持つて居たのを見て、こゝへ火を直しに、臺十能を持つて來かゝつた、お米が聲を掛けた。「いや――しかし、もう入れるか

い。「直きでございます。……今日は此の新館の湧きますから。」成程、雪の降りしきるなかに、ほんのりと湯の香が通ふ。洗面所の傍の西洋扉が湯殿らしい。この窓からも見える。新しく建増した柱立てのまゝ、筵がこひにしたのもあり、足場を組んだ處があり、材木を積んだ納屋もある。が、荒れた厩のやうに成つて、落葉に埋れた、一帯、脇本陣とでも言ひさうな舊家が、いつか世が成金とか言つた時代の景氣に連れて、桑も蠶も當つたであらう、此のあたりも水の燃えるやうな勢乗じて、蟄川はその昔は、煮え川にして、温泉の湧いた處だ。ぞと、こゝが温泉にでも成りさうな意氣込みで、新館建増にかゝつたのを、此の一座敷と、湯殿ばかりで、そのまゝ沙汰やみに成つた事など、あとで分つた。「女中さんかい、其の水を流すのは。」閉めたばかりの水道の栓を、女中が立ちながら一つづつ開けるのを視て、堪らず詰るやうに言つたが、次手に此の仔細も分つた。……池は、樹の板に樋を伏せて裏の川から引くのだが、一年に一二度づつ水涸があつて、池の水が干ようとする。鯉も鮒も、一處へ固つて、泡を立てゝ弱るので、臺所の大桶へ

汲込んだ井戸の水を、遙々と此の洗面所へ送つて、橋がりの下を潜らして、池へ流込むのださうであつた。

木曾道中の新版を二三種ばかり、枕もとに散らした炬燵へ、つぶ／＼と潜つて、「お米さん、・・・折入つて、お前さんに頼みがある。」と言ひかけて、初々しく一寸俯向くのを見ると、猛然として、喜多八を思ひ起して、我が境は一人で笑つた。「は、心配な事ではないよ。――お庇で腹按配も至つて好く成つたし、・・・午飯を抜いたから、晩には入合せに且つ食ひ、大に飲むとするんだが、いまね、伊作さんが澁苦い顔をして池を睨んで行きました。何うも、鯉のふとり工合を鑑定したもののらしい・・・屹と今晚の御馳走だと思ふんだ。――昨夜の鶉ぢやないけれど、何うも縁あつて池の前に越して来て、鯉と隣附合ひに成つて見ると、目の前から引上げられて、俎で輪切は酷い。・・・板前の都合もあらうし、また我がまゝを言ふのではない。

活づくりはお断りだが、實は鯉汁大歓迎なんだ。
しかし、魚屋か、何か、都合して、ほかの鯉を使つて貰ふわけには行くまいか。――差出て事だが、一尾か二尾で足りるものなら、お客は幾人だか、今夜の入用だけは私が其の原料を買つても可いから。」
女中の返事が、「いえ、此の池のは、いつもお料理にはつかひませんでございます。うちの旦那も、おかみさんも、御志の佛の日には、鮎だの、鯉だの、……此の池へ放しなさるんでございます。料理番さんも矢張り。……そして料理番は、此の池のを大事にして、可愛がつて、その所爲ですか、隙さへあれば、黙つてあゝやつて庭へ出て、池を覗いて居ますんです。」
「それはお誂だ。ありがたい。」
境は禮を言つたくらゐであつた。

雪の頂から星が一つ下つたやうに、入相の座敷に電燈の點いた時、女中が風呂を知らせに來た。「すぐ膳を。」と聲を掛けて置いて、待構へた湯どのへ、一散――例の洗面所の向うの扉を開けると、上場らしいが、ハテ眞暗である。いやいや、提灯が一燈ぼうと薄白く點いて居る。其處にもう一枚

扉があつて閉つて居た。その裡が湯どのらしい。

「半作事だと言ふから、まだ電燈が點かないのだらう。おゝ、二つ巴の紋だな。大星だか由良之助だかで、鼻を衝く、鬱陶しい巴の紋も、此處へ來ると、木曾殿の御寵愛を思出させるから奥床しい。」

と帯を解きかけると、ちやぶり　ー　といふ

ー　人が居て湯を使ふ氣勢がする。此の時、洗面所の水の音がハタと留んだ。

境はためらつた。

が、いつでも構はぬ。……他が濟んで、湯のあいた時を知らせて貰ひたいと言つて置いたのである。誰も入つては居まい。とに角と、解きかけた帯を挟んで、づーと寄つて、其の提灯の上から、扉にひつたりと頬をつけて伺ふと、袖のあたりに、すうーと暗く成る、蠟燭が、またぼうと明く成る。影が痣に成つて、巴が一つ片頬に映るやうに陰氣に沁込む、と思ふと、ばちやり……。内端に湯が動いた。何の隙間からか、芬と梅の香を、ぬくもりで溶かしたやづな白粉の香がする。

「婦人だ。」

何しろ、此の明では、男客にしる、一所に入ると、暗くて肩も手も跨ぎかねまい。乳に打着りかねまい。で、ばた／＼と草履を突掛けたまゝ引返した。

「もう、お上りに成りまして？」と言ふ。

通が遠い。こゝで爛をするつもりで、お米がさきへ銚子だけ持つて来て居たのである。

「いや、あとにする。」

「まあ、そんなにお腹がすいたんですの。」

「腹もすいたが、誰かお客が入つて居るから。」

「へい、．．．此方の湯どのは、久しく使はなかつたのですが、あの、然う言つては悪うございますけど、しばらくぶりで、お掃除かた／＼旦那様に立てましたのでございますから、．．．あの、まだ誰方とで頂きますまでも、．．．あの、まだ誰方も。」

「構やしない。私はゆつくりで可いんだが、婦人の客のやうだつたぜ。」

「へい。」

と、をかきなベソをかいた顔をすると、手に持つ
銚子が湯沸にカチノ、カチと震へたつけ、あとじさ
りに、ふいと立つて、廊下に出た。一度ひつそり登
音を消すや否や、けたゝましい音を、すたんと立てゝ
土間の板をはたノ、と鳴して駈出した。

境はきよとんとして、

「何だい、あれは……」

やがて膳を持つて顯れたのが……お米でな
い、年増のに替つて居た。

「やあ、中二階のおかみさん。」

行商人と、炬燵で睦じかつたのは此である。

「御亭主は何うしたい。」

「知りませんよ。」

「是非、承りたいんだがね。」

半ば串戯に、ぐツと聲を低くして、

「出るのがかい……何か……あの、湯
殿へ……眞個？」

「それがね、旦那、大笑ひなんでございます

よ。……誰方も在らつしやらないと思つて、

申上げましたのに、御婦人の方が入つておいでだつ

て、旦那がおつしやつたと言ふので、米ちゃん、大變な臆病なんですから。……久しくつかひません湯殿ですから、内のお上さんが、念のために、――

「あゝ然うか、……私はまた、一寸出るのかと思つたよ。」

「大丈夫、湯どのへは出ませんけれど、そのかはお座敷へはこんなのが、ね、貴方。」

「いや、結構。」

お酌は此の方が、けつく飲める。

夜は長い、雪はしん／＼と降出した。床を取つてから、酒をもう一度、その勢でぐつすり寝よう。晩飯は可い加減で膳を下げた。

登音が入亂れる。ばた／＼と廊下へ續くと、洗面所の方落合つたらしい。ちよろ／＼と水の音が又響き出した。男の聲も交つて聞える。それが止むと、お米が襖から圓い顔を出して、

「何うぞ、お風呂へ。」

「大丈夫か。」

「ほゝゝゝ。」

と些とてれたやうに笑ふと、身を廊下へ引くのに、
押續いて境は手拭を提げて出た。

橋がりの下口に、昨夜帳場に居た坊主頭の番頭
と、女中頭か、それとも女房かと思ふ老けた婦と、
もう一人の女中とが、といった形に顔を並べて、一
團に成つて此方を見た。其處へお米の姿が、足袋ま
で見えてちよこ／＼と橋がかりを越えて渡ると、三
人の懐へ飛込むやうに一團。

「御苦勞様。」

我がために、見とゞけ役の此の人数で、風呂を檢
べたのだと思ふから聲を掛けると、一度に揃つてお
時儀をして、屋根が萱ぶきの長土間に敷いた、その
あゆみ板を渡つて行く。土間のなかばで、其のおぢ
やのかたまりのやうな四人の形が暗く成つたのは、
トタツに、一つ二つ電燈がスツと息を引くやうに赤
く成つて、橋がりのも洗面所のも一齊にパツと消
えたのである。

と胸を吐くと、さら／＼さら／＼と三筋に・
・恚う順に流れて、洗面所を打つ水の下に、先刻
の提灯が朦朧と、半ば暗く、巴を一つ照して、墨で
かいた炎か、鯀の跳ねたか、と思ふ形に點れて居た。

いまにも電燈が點くだらう。湯殿口へ、これを持
つて入る氣で、境がこゞみ状に手を掛けようとする
と、提灯がフツと消えて見えなくなつた。

消えたのではない。矢張り是が以前の如く、湯殿
の戸口に點いて居た。此はおのづから霰して、下の
板敷の濡れたのに、目の加減で、向うから影が映し
たものであらう。はじめから、提灯が此處にあつた
次第ではない。境は、斜に影の宿つた水中の月を手
に取らうとしたと同一である。

爪さぐりに、例の上り場へ・・・で、念のた
めに戸口に寄ると、息が絶えさうに寂寞しながら、
ばちやんと音がした。ぞつと寒い。湯氣が天井から
霰に成つて點滴るのではなしに、屋根の雪が溶けて
落ちるやうな氣勢である。

ばちゃん、……ちやぶりと微かすかに湯ゆが動うごく。
と又また得えならず艶えんな、しかし冷つめたい、そして、にほやかな、霧きりに白粉おしろいを包つんだやうな、人膚ひとはだの氣きがすつと肩かたに絡まつて、項うなじを撫なでた。

脱ぬぐ筈はずの衣紋えもんを且かつつしめて、

「お米よめさんか。」

「いゝえ。」

と一呼ひと吸いき間まを置おいて、湯ゆどのの裡なかから聞きえたのは、
勿論もちろん我が心こころが我が耳みみに響ひびいたのであらう。――お
米よめでないのは言いふまでもなかつたのである。

洗面所せんめんじょの水みづの音おとがびつたり留やんだ。

思おもはず立竦たちすくんで四邊あたりを見みた。思切おもひきつて、

「入はいりますよ、御免ごめん。」

「いけません。」と澄すみつゝ、湯氣ゆげに濡ぬれ／＼と
した聲こゑが、はつきり聞きえた。

「勝手かってにしる！」

我われを忘わすれて言いつた時ときは、もう座敷ざしきへ引返ひきかへして居ゐた。

電燈は明るかつた。巴の提灯は此の光に消された。
が、水は三筋、更にさら／＼と走つて居た。

「馬鹿にしやがる。」

不氣味より、凄いより、なぶられたやうな、反感
が起つて、炬燵へ仰向けにひつくり返つた。

しばらくして、境が、飛上るやうに起直つたのは、
すぐ、窓の外に、ざぶり、ばちや／＼ばちや、ばち
や、ちやツと、けた／＼ましく池の水の掻攪さるゝ音
を聞いたからであつた。

「何だらう。」

ばちや／＼ばちや、ちやツ。

其處へ、ごそ／＼と池を廻つて響いて来た。人の
来るのは、何故か料理番だらうと思つたのは、此の
池の魚を愛惜すると、聞いて知つた／＼めであ
る。．．．．．

「何だい、何うしたんです。」

雨戸を開けて、一面の雪の色のや／＼薄い處に聲を
掛けた。その池も白いまで水は少いのであつた。

第三章

「どつちです、白鷺かね、五位鷺かね。」

「えゝーどつちもでございますな。兩方だ

らうと思ふんでございますが。」

料理番の伊作は来て、窓下の戸際に、ガツしり腕組をして、うしろ向に立つて言った。

「むかうの山口の大林から下りて来るんでございます。」

言の中にも顯れる、雪の降留んだ、その雲の一方は漆の如く森が黒い。

不斷の事ではありませんが、……此の、旦那、池の水の涸れる處を狙ふんでございます。鯉も鮒も半分鱗を出して、あがきつかないのでございますから。」

「伶俐な奴だね。」

「馬鹿な人間は困つ了ひます。魚が可哀相

でございますので……然うかと言つて、一夜、立番をしても居られませぬ。旦那、お寒うございます。おしめなさいまし。……そちこち御

注文の時刻でございますから、何か、不手際なものでも見繕つて差上げます。」

「都合がいたら、君が来て一杯、ゆつくりつき合つてくれないか。——私は夜ふかしは平氣だから。一所に……此處で飲んで居たら、いくらか案山子に成るだらう。……」

「——結構でございます。……もう臺所は片附きました、追つゝけ伺ひます。——いたづらな餓鬼どもめ。」

と、あとを口ごととで、空を睨みながら、枝をざら／＼と潜つて行く。

境は、しかし、あとの窓を閉めなかつた。勿論、極く細目には引いたが。——實は、雪の池の爰へ来て幾羽の鷺の、魚を狩る状を、さながら、炬燵で見のお伽話の繪のやうに思つたのである。驚破と言へば、追立つるとも、驚かすとも、その場合の事として……第一、氣もそゞるな事は、二度まで湯殿の湯の音は、いづれの隙間からか雪とゝもに、鷺が起ち込んで浴みしたらう」と然うさへ思つたほどであつた。

そのまゝ熟と覗いて居ると、薄黒く、ごそ／＼と雪を踏んで行く、伊作の袖の傍を、ふはりと巴の提灯が点いて行く。おゝ今、窓下では提灯を持つては居なかつたやうだ。――それに、もうやがて、庭を横ぎつて、濡縁か、戸口に入りさうだ、と思ふまで距つた。遠いまで小さく見える、唯少時して、ふとあとへ戻るやうな、やゝ大きく成つて、あの土間廊下の外の、萱屋根のつま下をすれ／＼に、段々此方へ引返す、引返すのが、氣の所為だか、いつの間にか、中へ入つて、土間の暗がりを點れて來る。……橋が／＼り、一方が洗面所、突當りが湯殿。……ハテナときよツとするまで氣がついたのは、その點れて來る提灯を、座敷へ振返らずに、逆に窓から庭の方に乗出しつゝ見て居る事であつた。

トタンに消えた。――頭からゾツとして、首筋を硬く振向くと、座敷に、白鷺かと思ふ女の後姿の頸脚がスツと白い。

違棚の傍に、十疊のその辰巳に据ゑた、姿見に向つた、うしろ姿である。……湯氣に山茶花の悄れたかと思ふ、濡れたやうに、しつとりと身につ

いた藍鼠の縞小紋に、朱鷲色と自のいち松のくつき
りした伊達巻で乳の下の縊れるばかり、消えさうな
弱牌に、裾模様が軽く靡いて、片膝をやゝ浮かした、
襖を友染が微り溢れる。露の垂りさうな圓鬘に、桔
梗色の手絡が背白い。淺葱の長襦袢の裏が媚かしく
搦んだ白い手で、刷毛を優しく使ひながら、姿見を
少しこゞみなりに覗くやうにして、化粧をして居た。

境は起つても坐るも知らず息を詰めたのである。

あはれ、着た衣は雪の下なる薄もみぢで、膚の雪
が、却つて薄もみぢを包んだかと思ふ、深く脱いだ
襟脚を、すらりと引いて搔合すと、ぼつとりとして
膝近だつた懷紙を取つて、くる／＼と丸げて、掌を
拭いて落したのが、疊へ白粉のこぼれるやうであつ
た。

衣摺れが、さらりとした時、湯どのできた人膚
に紛ふ留南奇が薫つて、少し斜めに居返ると、煙草
を含んだ。吸口が白く、艶々と煙管が黒い。

トーンと、灰吹の音が響いた。

屹と向いて、境を見た瓜核顔は、目ぶちがふつくりと、鼻筋通つて、色の白さは凄いやう。――気の籠つた優しい眉の両方を、懐紙でひたと隠して、大な瞳で熟と視て、

「・・・似合ひますか。」

と、莞爾した齒が黒い。唯、莞爾しながら、襟を合せ状にすつくりと立つた。顔が鴨居に、すら／＼と丈が伸びた。

境は胸が飛んで、腰が浮いて、肩が宙へ上つた。ふはりと、其の婦の袖で抱上げられたと思つたのは、然うでない、横に口に引銜へられて、疊を空に釣上げられたのである。

山が眞黒に成つた。いや、庭が白いと、目に遮つた時は、スツと窓を出たので、手足はいつか、尾鰭に成り、我はびち／＼と跳ねて、婦の姿は廂を横に、ふは／＼と欄間の天人のやうに見えた。

白い森も、白い家も、目の下に、忽ち颯と・・・
・空高く、松本城の天守をすれ／＼に飛んだやう
に思ふと、水の音がして、もんどり打って池の中へ
落ちると、同時に炬燵でハツと我に返つた。

池におびたゞしい羽音が聞えた。

此の案山子になど追へるものか。

バスケットの、蔦の血を見るにつけても、青い呼吸
吸をういてぐつたりした。

廊下へ、しと／＼と人の音がする。ハツと息を引
いて立つと、料理番が膳に銚子を添へて來た。

「やあ、伊作さん。」

「おゝ、旦那。」

第四章

「昨年さくねんの丁どちやうど今頃いまころでございました。」

料理番れうりばんはひしと、身みを寄よせ、肩かたをしめて話はなし出した。
た。

「今年ことしは今朝けさから雪ゆきに成なりましたが、其そのみぎりは、忘れわすれもしません、前日ぜんじつが雪ゆきが降りふりました。積つもり方は、もつと多おほかつたのでございます。――二時頃じじころに、目の覺めめさますやうな御婦人客ごふじんきやくが、唯たゞお一方ひとかたで、おいでに成なつたのでございます。――目の覺めめるやうだと申まをしても派手はでではありません。婀娜あだな中に、何なんとなく寂さびしさのございます、二十六七のお年としごろで、高等かうとうな鬘まるまげでおいででございます。――御ご容子やうすのいゝ、背せのすらりとした、見み立ての申分まをしぶんのな、い、しかし奥様おくさまと申まをすには、何處どこか媚なまめかしさが過ぎすて居をります。其處そこは、田舎いなかものでも、大勢おほぜいお客様きやくさまをお見みかけ申まをして居をりますから、直ぢきにころうと衆しゆだと存ぞんじましたのでございまして、此これが柳橋やなぎばしの蓑吉みのきちさんと言いふ姐ねえさんだつた事ことが、後のちに分わかりました。宿帳やどぢの方はお艶様つやさまでございます。

その御婦人を、旦那　――　帳場で、此のお座敷へ御案内申したのでございます。

風呂がお好きで・・・勿論、お嫌な方も澤山でございますまいが、あの湯へ二度、お着きに成つて、すぐと、それに夜分に一度、お入りなすつたのでございませう。――都合で、新館の建出しは見合せてをりますが、温泉ごのみに石で畳みました風呂は、自慢でございまして、舊の二階三階のお客様にも、些と遠うございませうけれども、お入りを願つて居りました處が――實はその、時々、不思議な事がありますので、此のお座敷も同様に多日使はずに置きましたのを、旦那のやうな方に試みて頂けば、おのづと變な事もなくなりませうと、相談をいたしまして、申すもいかゞでございませうが、今日久しぶりで、湧かしも使ひもいたしましたやうな次第なのでございます。

處で、お艶様、その御婦人でございますが、日の中一風呂お浴びになりますと、（鎮守様のお宮は、）と聞いて、お参詣なさいました。蟄川街道よりの丘の上でございます。――山王様のお社で、むか

し人身御供があがつたなど、申傳へてございます。
森々と、もの寂しいお社で。……村社はほか
にもございますが、鎮守と言ふ、お尋ねにつけて、
その儀を帳場で申しますと……道を尋ねて、
其處でお一人でおのぼりなさいました。目を少々お
煩ひのやうで、雪がきら／＼して疼むからと言つて、
こんな土地でございます、ほんの出来あひの黒い目
金を買はせて、掛けて、洋傘を杖のやうにしてお出
掛けて。――此れは鎮守様へ参詣は、奈良井宿一
統への禮儀挨拶と言ふお心だつたやうでございます。

無事に、先づお歸りなすつて、夕飯の時、お膳で
一口あがりました。――旦那の前でございますが、
板前へと、御丁寧にお心づけを下すつたものでござ
いますから私……一寸御挨拶に出ました時、
恚う言ふおたづねでございます。――お社へお供
物にきざ柿と楊枝とを買ひました、……石段
下の其處の小店のお媪さんの話ですが、山王様の奥
が深い森で、其の奥に桔梗ヶ原と言ふ、原の中に、
桔梗の池と言ふのがあつて、その池に、お一方、お
美しい奥様が在らつしやると言、ふことですが、眞

個ですか。――

「――眞個でございます、と皆まで承はらないで、私が申したのでございます。」

論より證據、申して、よいか、悪いか存じませんが、現に私が一度見ましたのでございます。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「桔梗ヶ原とは申しますが、それは、秋草は綺麗に咲きます、けれども、桔梗ばかりと言ふのではございません。唯其の大池の水が眞桔梗の青い色でございます。桔梗は却つて、白い花のが見事に咲きますのでございます。」

四年あとに成りますが、正午と言ふのに、此の峠向うの藪原宿から火が出ました。正午の刻の火事は大きく成ると、何國でも申しますが、全く大焼でございますました。

山王様の丘へ上りますと、一目に見えます。火の手は、七條にも上りまして、ばち／＼ばん／＼と燃

る音が手に取るやうに聞えます。．．．あれは山間の瀧か、いや、ぼんぷの水の走ると申すくらゐ。此の大南風の勢では、山火事に成つて、やがて、こゝもとまで押寄せはしまいかと案じますほどの激しさで、駈けつけるものは駈けつけます、騒ぐものは騒ぐ。私などは見物の方で、お杜前は、おなじ夥間で充満でございました。

二百十日の荒れ前で、残暑の激しい時でございましたから、つい／＼少しづつお社の森の中へ火を見ながら入りましたにつけて、不斷は、しつかり行くまじきとしてある處ではございますが、此の火の陽氣で、人の氣の湧いて居る場所から、深いと言つても半町とはない。大丈夫と。處で、私陰氣もので、餘り若衆づきあひがございせんから、誰を誘ふてもあるまいと、杉檜の森々としました中を、それも、思つたほど奥が深くもございせんので、一面の草花。．．．白い桔梗でへりを取つた百疊敷ばかりの眞青な池が、と見ますと、その汀、ものゝ

二、．．．三、．．．十間とはない處
に、．．．お一人、何ともおうつくしい御婦人が、

鏡臺を置いて、斜に向つて、お化粧をなさつて在ら
つしやいました。

お髪が何うやら、お召ものが何やら、一目見まし
た、其の時の凄さ、可恐さと言つてはございません。
唯今思出しましても御酒が氷に成つて胸へ沁みます。
慄然します。．．．それで居てそのお美しさが
忘れられません。勿體ないやうでございますけれど
も、家のないものゝお佛壇に、うつしたお姿と存じ
まして、一日でも、此の池の水を視めまして、その
面影を思はずには居られませんのでございます。――
さあ、その時は、前後も存ぜず、翼の折れた鳥が、
たゞ空から落ちるやうな思で、森を飛抜けて、一目
散に、高い石段を駈下りました。私はその顔の色と、
怯えた様子とはなかつたさうでございまして
な。．．．お社前の火事見物が、一雪崩に成つ
て遁下りました。森の奥から火を消すばかり冷い風
で、大蛇が颯と折つたやうで、遁げた私は、野兎の
飛んで落ちるやうに見えたと言ふ事でございます。

と此の趣を――お艷様、その御婦人に申しま

すと、―― 然うしたお方を、何うして、女神様
とも、お姫様とも言はないで、奥さまと言ふんでせ
う。さ、其でございます。私は唯日が暗んで了ひま
したが、前々より、ふとお見上げ申したものゝ言ふ
のでは、桔梗の池のお姿は、眉をおとして在らつし
やりまするさうで……」

境はゾツとしながら、却つて炬燵を傍へ拂つた。

「誰方の奥方とも存ぜずに、いつとなく然う申す
のでございまして……旦那。―― お艷様に
申しますと、ぢつとお聞きなすつて―― だと、
その奥さまのお姿は、ほかにも見た方がありますか、
とおつしやいます。―― えゝ、月の山の端、花の
麓路、螢の影、時雨の提灯、雪の川べりなど、随分
村方でも、ちらりと拝んだものはございます。――
お艷様は此をきいて、猪口を下に置いて、なぜか、
悄乎とおうつむきなさいました。――」

―― 處で旦那……その御婦人が、わざ／＼
木曾の此の山家へ一人旅をなされた、用事がござ

「いまする。」

第五章

「え、其の時、此の、村方で、不思議千萬な、色出入、—— 變な姦通事件がございました。

村人の雁股と申す處に（代官婆）と言ふ、庄屋のお婆さんと言へば、まだしをらしく聞えますが、代官婆。……渾名で分りますくらゐ可恐しく権柄な、家の系圖を鼻に掛けて、俺が家はむかし代官だぞよ、と二言めには、たつみ上りに成りますので、其の了筒でございますから、中年から後家に成りながら、手一つで、先づ……悴どのを立派に育て、此を東京で學士先生にまで仕立てました。……其處で一頃は東京住居をして居りましたが、何でも一旦微禄した、家を、故郷に打開けて、村中の面を見返すと申して、沽券漬の古家を買ひまして、兩三年前から、其の悴の學士先生の嫁御、近頃で申す若夫人と、二人で引籠つて居ります。……菜大根、茄子などは料理に醬油が費だと言ふ儉約で、葱、韭、大蒜、辣韭と申す五蘊の類を、空地中に植込んで、鹽で辨ずるのでございま

して。……もう遠くから芬と、其の家が臭ひ
ます。大蒜屋敷の代官婆と。……

處が若夫人、嫁御と言ふのが、福島ふくしまの商家しやうかの娘むすめさ
んで學校がくかうをでた方かただが、當世たうせいに似合にあはないおとなし
い優しい、些ちと内輪うちわ過ぎますぐらゐ。尤もつとも此これでなく
つては代官婆だいくわんばと二人住居ふたりずまひは出来できません。……
大蒜にんにくばなれのした方かたで、鋤すきにも、鍬くはにも、連尺れんじやくにも、
婆ばどのに追使おひつかはれて、いたはしいほどよく辛抱しんぼうなさ
います。

霜月しもつきの半なかば過ぎに、不意ふいに東京とうきやうから大蒜屋敷にんにくやしきへお
客人きやくじんがございました。學士がくし先生せんせいのお友ともだちで、此この
方かたは何處どこへも勤つとめては居ゐなさらない、尤もつとも畫帥ゑかきださ
うでございいますから、極きまつた勤つとめとしてはございいますま
い。學士がくし先生せんせいの方はうは、東京とうきやうの一あ中學校ちゆうがくかうで歴乎れつきとした
校長かうちやうさんでございいますが。――

で、その畫帥ゑかきさんが、不意ふいに、大蒜屋敷にんにくやしきに飛込とびこ
で參まつたのは、碌ろくに旅費りよひも持もたずに、東京とうきやうから遁出にげだ
して來きたのださうで。……と申まをしますのは

「――早い話が、細君がありながら、よそに深い
馴染が出来ました。……それがために、首尾
も義理も世の中は、さん／＼で、思ひ餘つて細君
が意見をなすつたのを、何を！と言つて、一つ横
頬を撲はしたはいゝが、御先祖、お両親の位牌にも、
くらはされて然るべきは自分の方で、佛壇のある我
家には居たゝまらないために、其の場から門を駈出
したは出たとして、知合にも友だちにも、女房に意
見をされるほどの始末で見れば、行處がなかつたの
で、一夜しのぎに、此の木曾谷まで遁込んだのださ
うでございます、遁げましたなあ。……それ
に、その細君と言ふのが、はじめ畫師さんには戀人
で、晴れて夫婦に成るのには、此の學士先生が大層
なお骨折で、そのお庇で思が叶つたと申したやうな
わけださうで。……遁込み場所には屈竟なの
でございます。

時に、弱りものゝ畫師さんの、その深い馴染と言
ふのが、もし、何と……お艶様――手前
どもへ一人でお泊りに成つた其の御婦人なんぞござ
います。……一寸申上げて置きますが、これ

は畫師さんのあとをたづねて、雪を分けておいでに
成つたのではございません。その間が雑と半月ばかり
ございました。その間に、唯今申しました、姦通
騒ぎが起つたのでございます。」

と料理番は一息した。

「其處で……また代官婆に變な癖がござい
ましてな。癖より病で——或るもの知の方に承
りましたのでは、訴訟狂とか申すんださうで、葱が
枯れたと言つては村役場だ、小兒が睨んだと言へば
交番だ。……派出所だ裁判だと、何でも上沙
汰にさへ持出せば、我に理があると、それ貴客、代
官婆だけに思込んで居りますのでございます。」

その、大蒜屋敷の雁股へ掛ります、この街道、棒
鼻の辻に、巖穴のやうな窪地に引込んで、石松と言
ふ獵師が、小兒澤山で籠つて居ります。四十親仁で、
此の小僧の時は、まだ微禄をしません以前の……
・其の婆の許に下男奉公、女房も女中奉公をした
ものださうで。……婆が強う家來扱ひにする
のでございますが、石松獵師も、豎い親仁で、甚し

く御主人に奉つて居りますので。

宵の雨が雪に成りまして、その年の初雪が思ひのほか、夜半を掛けて積りました。山の、猪、兎が慌てます。獵は恚う云ふ時だと、夜更に、のそ／＼と起きて、鐵砲しらべをして、爐端で茶漬を掻食つて、手製の猿の皮の毛頭巾を被つた。筵の戸口へ、白髪を振亂して、蕎麥切色の禪・・・可厭な奴で、とき色の禿げたのを不斷まきます、尻端折りで、六十九歳の代官婆が、跣足で雪の中に突立ちました。「内へ怪ものが出た、来てくれせえ。」と顔色、手振で喘いで言ふので。・・・こんな時鐵砲は強うございますよ、ガチリ、實弾をこめました。・・・舊主人の後室様がお跣足でございまして、石松も素跣足。街道を突切つて蒜、辣蕪、葱畑を、さつ／＼と、化ものを見届けるのぢや、靜にと言ふ事で、婆が出て來ました納戸口から入つて、中土間へ忍んで、指されるなりに、板戸の節穴から覗きますとな、――何と、六枚折の屏風の裡に、枕を並べて、と申すのが、寢ては居なかつたさうでございませう。若夫人が緋の長襦袢で、掻卷の襟の肩

から、這つた半身で、畫師の膝に白い手をかけて俯向に成りました、背中を男が、撫でさすつて居たださうで。いつもは、もんぺを穿いて、木綿のちやん／＼ここで居る嫁御が、其の姿で、然も其のありさまでございます。石松は化もの以上に驚いたに相違ございません。「おのれ、不義もの……人畜生。」と代官婆が土蜘蛛のやうにのさばり込んで、「やい、……動くな、その状を一寸でも動いて崩すと——鐵砲だぞよ、彈丸だぞよ。」と言ふ。にじり上りの屏風の端から、鐵砲の銃口を又ツと突出して、毛の生えた墓のやうな石松が、目を光らして狙つて居ります。

人相と言ひ、場合と申し、ツドンと遣りかねない勢でございますから、畫師さんは面喰つたに相違ございませんまい。「天罰は立處ぢや、足四本、手四つ、顔二つのさらしものにして遣るべ。」で、代官婆は、近所の村方四軒と言ふもの、其の足でたゞき起して廻つて、石松が鐵砲を向けたまゝの、其のありさまをさらしました。——夜のあけ方には、派出所の巡查、檀那寺の和尚まで立會はせると言ふ狂ひ方

でございました。學士先生の若夫人と色男の畫師さん
は、恚う成ると、緋鹿子の扱帯も藁すべで、彩色
をした海鼠のやうに、雪にしらけて、ぐつたりと成
つたのでございます。

男はとにかく、嫁は眞個に、うしろ手に縛りあげ
ると、細引を持出すのを、巡査が叱りましたが、叱
られると尚は吼り立つて、忽ち、裁判所、村役場、
派出所も村會も一所にして、姦通の告訴をすると、
のぼせ上るので、何處へも遣らぬ監禁同様と言ふ趣
で、一先づ檀那寺まで引上げる事に成りましたが、
活證據だと言張つて、嫁に衣服を着せることを肯き
ませんので、巡査さんが、雪のかゝつた外套を掛け
まして、何と、しかし、ぞろ／＼と村の女小兒まで
あとへついて、寺へ參つたのでございますが。」

境はきつゝ、たゞ幾度も歎息した。

「――遁がしたのでございませうな。畫師さん
はその夜のうちに、寺から影をかくしました。此
は然うあるべきでございます。――さて、聞きま

すれば、—— 悴せがれの親友しんゆう、兄弟きやうだい同様の客きやくぢやから、
悴せがれ同様に心得こころえる。．．．．半年はんとしあまりも留守るすを守まも
つてさみしく一人ひとりで居ある事ことゆゑ、嫁女よめぢやや、そなたも、
悴せがれと思おもうて、つもる話はなしもせいよ、と申まをして、身みじま
ひをさせて、きものまで着きかへさせ、寝ねる時ときは、に
こ／＼笑わらひながら、床とこを並ならべさせたのだと申まをすこと
で。．．．．嫁御よめごは成程なるほど、わけしりの弟分おとうとぶんの膝ひざに
縋すがつて泣なきたい事こともありましたらうし、藝妓げいしやでしく
じるほどの畫師ゑかきさんでございます、背中せなかを擦さするぐら
ゐはしかねますまい、．．．．でございますな。

代官だいくわん婆ばの憤方いきどほりかたを御察おさつしなさりたう存ぞんじます。學士がくし
先生せんせいは電報でんぱうで呼よばれました。何なんと宥なだめても承知しょうちをし
ません。是非せひとも姦通かんつうの訴訟そしやうを起おこせ。いや、恥はぢも外ぐわい
聞ぶんもない、代官だいくわんと言いへば帶刀たいたうぢや。武士ぶしたるものは、
不義ふぎものを成敗せいばいするは却かへつて名譽めいよぢや、と恚かうまで
間違まちがつては事面倒ことめんたうで。斷たつて、裁判沙汰さいばんざたにしないと
なら、生いもきて居をらぬ。咽喉のど笛ぶえ鐵砲てつぱうぢや、鎌腹かまばらぢや、
奈良井川ならゐがはの淵ふちを知らぬか。．．．．枯梗きくやうケ池いけへ身み
を沈しづめる。．．．．此こ、此こ、この婆ばめ、沙汰さたの限かぎり
な、桔梗きくやうケ池いけへ沈しづめますものか、身み投なげをしようとし

たら、池が投出しませう。」
と言つて、料理番は苦笑した。

「また、今時に珍しい、學校でも、倫理、道徳、修身の方を御研究もなされば、お教へもなさいます、學士は至つての御孝心。豫て評判な方で、嫁御をいたはる傍の目には、些と弱過ぎると思ふほどなのでございませうから、困じ果てゝ、何とも申しわけも面目もなければ、とに角一度、此の土地へ來て貰ひたい。萬事はその上で。と言ふ——學士先生から畫師さんへのお頼みでございませう。」

さて、これは決闘状より可恐い。……勿論村でも不義ものゝ面へ、唾と石とを、人間の道のためとか申して騒ぐ方が多い眞中でございませうか。……どの面さげて畫師さんが奈良井へ二度面がさらされませう、旦那。」

「これは何と言はれても來られまいなあ。」
「と言つて、學士先生との義理合では來ないわけにはまゐりますまい。處で、その畫師さんは、その

時、何處に居たと思召します。 . . . いろの事
から、怪しからん、横頬を撲つたと言ふ細君の、袖
のかけに、申しわけのない親御たちのお位牌から頭
をかくして、尻も足もわな／＼と震へて居ましたの
で、弱つた方でございます。 . . . 必ず、連れ
て参ります。 . . . と代官婆に、誓つて約束をなさ
いまして、學士先生は東京へ立たれました。

その上京中。その間の事なのでございます、 . . .
柳橋の蓑吉姉さん . . . お艷様が . . .
こゝへお泊りに成りましたのは
「

第六章

「―― どのような用事の御都合にいたせ、夜中、近所が静りましたから、お艷様が、おたづねに成らうと言ふのが、代官婆の處と承つては、一人ではお出し申されません。たゞ道だけ聞けば、との事でございましてけれども、おともが直接について悪ければ、栢根、裏口にでもひそみまして、内々守つて進じようで……帳場が相談をしまして、其の人選に當りましたのが、此の、不つゝかな私なんのでございまして。

お支度がよろしくばと、私、此へ……此のお座敷へ提灯を持つて伺ひますと……」
「あゝ、二つ巴の紋のだね。」と、つい誘はれるやうに境が言つた。

「へい。」
と暗く、含むやうな、頤で返事を吸つて、

「よく御存じで。」

「二度まで、湯殿に點いて居て、知つて居ます

よ。

「へい、湯殿に……湯殿に提灯を点けます
やうな事はございませんが、――
それとも、へーい。」

此の様子では、今しがた庭を行く時、此の料理番
ととも提灯が通つたなど言出せまい。境は話を促した。

「それから。」

「些と變な氣がいたしますが。――え、ざつ
とお支度済で、二度めの湯上りに薄化粧をなすつた、
めしもの、藍鼠がお顔の影に藤色に成つて見えます
まで、お色の白さつたらありません、姿見の前
で……」

境が思はず振返つた事は言ふまでもない。

「金の吸口で、烏金で張つた煙管で、一寸齒を染
めなすつたやうに見えます。懐紙をな、眉にあて、
私を、おも長に御覽なすつて、

「――似合ひますか。――」

「むゝ、む。」と言ふ境の聲は、氷を頼張つたやうに咽喉に支へた。

「疊のへりが、桔梗で白いやうに見えました。

「えゝ、勿體ないほどお似合で。」

と言ふのを聞いて、懷紙をおのけに成ると、眉のあとがいま剃立ての眞青で。．．．「桔梗ケ池の奥様とは？」
「――お姉妹．．．いや一倍お綺麗で。」と罰もあたれ、然う申さずには居られなかつたのでございます。

こゝをお聞きなさいまし。．．．

「お艶さん、何うしませう。」

「雪がちら／＼雨まじりで降る中を、破れた蛇目傘で、見すばらしい半纏で、意氣にやつれた畫師さんの細君が、男を寝取つた情婦とも言はず、お艶様――本妻が、その體では、情婦だつて工面は悪うございます。目を煩らつて、しばらく親許へ、納屋同然な二階借りで引籠つて、内職に、娘子供に長唄なんか、さらつて暮して居なさる處へ、思餘つて、細君が訪ねたのでございます。」

「お艶さん、私は然う存じます。私が、貴女はどお美しければ、「こんな女房がついて居ます。何の夫が、木曾街道の女なんぞに。」と姦通呼はりをする其の婆に、然う言つて遣るのが一番早分りがすると思ひます。」
「え、何よりですともさ。それよりか、尚ほ其上に、お妾でさへ此のくらゐだ。」
と言つて私を見せて遣ります方が、上に尚は奥さんと云ふ、奥行があつて可うございます。――
「奥さんのほかに、私ほどのいるがついて居ます。田舎で意地ぎたなをするもんですか。」
婆に然う言つてやりませうよ。そのお嫁さんのためにも。

――

「――あとで、お艶様の、したゝめもの、かきおきなどに、此の様子が見える事に、何とも何うも、も、つい立至つたのでございまして。……
此でございしますから、何の木曾の山猿なんか。しかし、念のために土地の女の風俗を見ようと、山王様御参詣は、その下心だつたかとも存じられま
す。……處を、桔梗ヶ池の、凄、美しいお

方の事をおきゝなすつて、これが時々人目にも觸れ
ると言ふので、自然、代官婆の目にもとまつて居て、
自分の容色の見劣りがする段には、美しさで勝つこ
とは出来ない、と云ふ覺悟だつたと思はれます。――
尤も西洋剃刀をお持ちだつたほどで。―― それ
で不可なければ、世の中に煩い婆、人だすけに切つ
了ふ。―― それも、かきおきにございました。

雪道を雁股まで、棒端をさして、奈良井川の支流
れの、青白いつゝみを参りました。氷のやうな月が
皎々と冴えながら、山氣が霧に凝つて包みます。巖
石、ぐわう／＼の細い谿川が、寒さに水涸れして、
さら／＼さら／＼、・・・・あゝ、丁ど、あの音、
洗面所の、あの音でございます。」

「一寸、あの水口を留めて來ないか、身體の筋々
へ沁渡るやうだ。」

「御同然でございまして・・・・えゝ、しかし、
何うも。」

「一人ぢや不可いかね。」

「貴方様は？」

「いや、何、何うしたんだい、それから。」

「岩と岩に、土橋が架りまして、向うに槐の大きいのが枯れて立ちます。それが危かしく、水で揺れるやうに月影に見えました時、ジ、イト、私の持ちました提灯の蝋燭が煮えまして、ぼんやり灯を引きます。「暗くなると、巴が一つに成つて、人魂の黒いのが歩行くやうね。」 お艶様の言葉に――

私はツとして覗きますと、不注竟にも、何にも、お綺麗さに、そはつきましたか、と、もうかけが乏しく成つて、かへの蝋燭が入れてございません。――

おつき申しては居ります、月夜だし、足許に差支へはございませんやうなもの、當館の紋の提灯は、一寸土地では幅が利きます。あなたのおためにと思ひまして、道はまだ半町足らず、つい一走り、駐戻りました。此が間違でございます。」

「聲も、言も、しばらく途絶えた。」

「裏土堀から臺所口へ、……まだ入りませんさきに、ドーンと天狗星の落ちたやうな音がしました。ドーンと笏を返しました。鐵砲でございます」

す。」

「……………」

「吃驚して土手へ出ますと、川べりに、薄い銀のやうでございましたお姿が見えません。提灯も何も押放出して、自分でワツと言つて駈けつけますと、居處が少しずれて、バツタリと土手腹の雪を枕に、帯腰が谿川の石に倒れておいででした。「寒いわ。」

と現のやうに、「あゝ、冷い。」とおつしやる
と、その唇から絲のやうに、三條に分れた血が垂れました。

「何とも、かとも、おいたはしい事に――
裾をつゝまうといたします、亂れ褌の友染が、色をそのまゝに岩に凍りついて、霜の秋草に觸るやうだつたのでございます。――人も立會ひ、抱起し申す縮紬が、氷でバリノゝと音がしまして、古襖から錦繪を剥がすやうで、此の方が、お身體を裂く思がしました。胸に溜つた血は暖く流れましたのに。」

「――撃ちましたのは石松で。……親仁が生計の苦しさから、今夜こそは、何うでも獲ものを

と、しとぎ餅で山の神を祈つて出ました。玉味噌を塗つて、串にさして焼いて持ちます、その握飯には、魔が寄ると申します。がり／＼橋と言ふ、其の土橋にかゝりますと、お艶様の方では人が来るのを、よけようと、水が少いから、つい川の岩に片足おかけなすつた、桔梗ヶ池の怪しい奥様が、水の上を横に傳ふと見て、バツと臥打に狙をつけた。俺は魔を退治したのだ。村方のためにと言つて、いまもつて狂つて居ります。――

旦那、旦那、旦那、提灯が、あれへ、あ、あの、湯どの、橋から、……あ、あ、あ、旦那、向うから、私が來ます、私とおなじ男が参ります。や、並んで、お艶様が。」

「境も齒の根をくひしめて、
「確乎しろ、可恐くはない、可恐くはない。・
・
・
「怨まれるわけではない。」

電燈の球が巴に成つて、黒くふはりと浮くと、炬燵の上に提灯がぼうと掛つた。

「似合ひますか。」

梗やうの汀みぎはに咲さいたやうに畳たくみに乱みだれ敷しいた。
座敷ざしきは一面いちめんの水みづに見みえて、雪ゆきの氣けはひが、白しろい桔きく

【完】